

地域に広がる教育力の再発見

—川崎における子育て世代への支援—

(提 言)

＝今期の研究課題と方向性＝

1. 孤立する家庭と子ども

現在の子どもたちをとりまく環境についていえば、地域でのコミュニケーションの機会が、同世代間においても異世代間においても少なくなっている。子育て世代の親には、多忙をきわめ親子の会話も十分ではないという状況も散見される。家庭での会話を取り戻すにはどうすればよいのかが問われている。

子育てしている人の悩みに答えたり心を支えたりすること、行き場のない子どもたちに居場所を提供することが急務と思われる。温かいまなざしがあれば、子どもはどこにいても安心でき、つらさを聞いてもらえれば、親も安心できる。今日の子育て世代の親たちや子どもの孤立化に向き合うことなしには、川崎市の豊かな子育て・親育ちの未来はないのではないだろうか。

2. 社会教育でできること — 期待される地域や大人の役割

川崎市は大規模住宅開発や高層マンションが増えたことから、子育て世代の人口の転入が増えている。これは子育て世代にとって、川崎が住みやすい町として見られていることを意味する。と同時に、川崎市にとって、これら世代への支援がきわめて重要な課題であることをも意味する。

地域には豊富な子育て資源が内包されている。にもかかわらず、それが新しく川崎市を生活の場として歩み始めた子育て世代にとっての子育てに活かされていらないと思われる。そうだとすれば、そうした新しい親たちと地域を結び付けることにこそ、社会教育が力を発揮する出番がある。地域の教育力を高めていくことを考える上で、コーディネートという機能はとても重要であるといえる。

3. 今期の課題

身近に自分の興味を引くものがある、知り合いの人がいる・自分たちを知っている人たちがいる、求める情報が手に入るといった親近感のもてる安心できるネットワークをつくっていく必要がある。

そこで、子どものことも高齢者のことも考えるという地域社会を再構築していく社会教育活動の拠点やシステムを探求することとした。その糸口は決して遠くはなく、現在、地域に展開するさまざまな教育資源（人・施設・仕組みなど）をいかに活用できるのかということから検討することにした。

＝家庭が孤立しない地域のサポート＝ （まとめと提言）



神輿を担ぐ子ども達

1 地域全体による親サポート・親の子育てサポート

川崎市は、子育てしやすいコミュニティを目指して、「社会全体で子育てを支える」という姿勢を早い時期から打ち出している。この基本姿勢が定められたのは、子育て世代の親の孤立は育児ノイローゼや虐待の発生につながるとの報告があるためであり、川崎市は親が子育てする際に感じる不安や悩みを地域の中での他者との交流を通して解消すること、そこまでできなくても、悩みや不安を互いに支え合うことで、子育てを親にのみ責任を持たせるのではなく、一人ひとりの親が安心して子育てできるように、子育てと親育ち両方をサポートするようにしたのである。今回のレポートは実際の事例検証を通して、この姿勢の大切さが再認識された。

2 「学校」を拠点としたサポートの大切さと今後の課題

地域コミュニティが子育て世代をサポートする場合、具体的な「場」が必要である。どのようなコミュニティが最もよいかについての検討では、「学校」が一つのキーワードとして浮かび上がった。その理由は、学校は地域の施設であり、安全な場所であり、しかも多様なプログラムに対応できるようになっているからである。特に、今回レポートが対象としたのは小学校や中学校の子どもを持つ親世代の場合、学校は子どもの生活の中心であるため、それが自然と親世代にも学校に対する親近感をもたらす。川崎市教育プラン第2期計画の中でも、「地域を主体とした学校施設の有効活用事業の推進」の1項があって、学校は学校教育を行う場だけでなく、地域の教育力を展開する場でもあるようにしたのである。その結果、臨港中学校等のような学校と地域がコラボレーションした事例が生まれた。今後、学校をキーワードにしたサポートの活用方法をさらに展開できるように模索すると同時に、今回対象にしていない就学前の子どもたちとその親が居やすい場をどこにしたらいいのかについて考える必要がある。

3 多様なサポートプログラムと「地域教育会議」の役割及び課題

今回のレポートで、地域には子育て世代をサポートするだけでなく、子どもを成長させる力があることも確認できた。中学生の職業体験、祭りや七草粥の開催、環境教育体験、これらの活動は、学校もしくは文化協会という一つの組織だけではできなかったことを、地域を巻き込むことで、子どもも大人もダイレクトなコミュニケーションが生まれ、地域も学校も生き生きとしてきた事例である。子どもの成長は多くの人たちが協力する必要があるとの証明でもある。

また、地域が学校と上手に協力できるためには「地域教育会議」が果たしている役割は大きい。1986年に発足し、1997年に全市の中学校区に設立された「地域教育会議」は、学校と

いう場を使って、学校、地域、行政が共に集まり、地域住民のニーズを把握したうえ、教育を語るつどいや子ども会議などの活動を企画・実行を行っている。地域の教育力を地域のニーズに焦点を当てて実行し、子どもと親を支える極めて効果的な会合である。今回のレポートにおいても、その役割は大きいと出ている。ただし、課題も出ている。すなわち、運営は参加者の熱意による部分が大きく、後継者がなかなか育たず、活動の広がりにおいても鈍いところがある。転入された若年層が多い川崎市では、地域への愛着がまだ十分ではなく、さらに、共働き家庭なら地域への定着がさらに時間がかかることから、今後、地域教育会議の在り方や広がりに関する検討も必要となるであろう。

4 地域資源を引き出すための社会教育コーディネーターの養成と市民館の役割

川崎市には、子育てサポートのための様々な社会資源を有している。「わくわくプラザ」や「こども文化センター」などだけでなく、「おやじの会」のような組織やNPOなども多数ある。多くの資源が存在している故に、ややもすれば、市民に十分に周知されずに終わってしまうこともある。この問題を解決する方法として、今期社会教育委員は、各区に社会教育コーディネーターを置くことを提案したい。社会教育コーディネーターの役割は、①地域の教育資源を掘り起こし、それを必要な人に伝え、活用して貰う。②地域の教育資源の維持、有効活用のための工夫、運営等である。また、コーディネーター養成はできれば、社会教育の発信基地である市民館が中心となることがベストであると考えている。市民館は元来様々な情報を市民に提供することと、市民のニーズに応じた教育を行う機会と場を提供する役割を持っているからである。そのため、市民館に社会教育の知識を持つ専門性のある職員継続的な配置が望ましいであろう。

5 幅広い子育て世代のニーズにあった統合的なシステムの再検討と整備

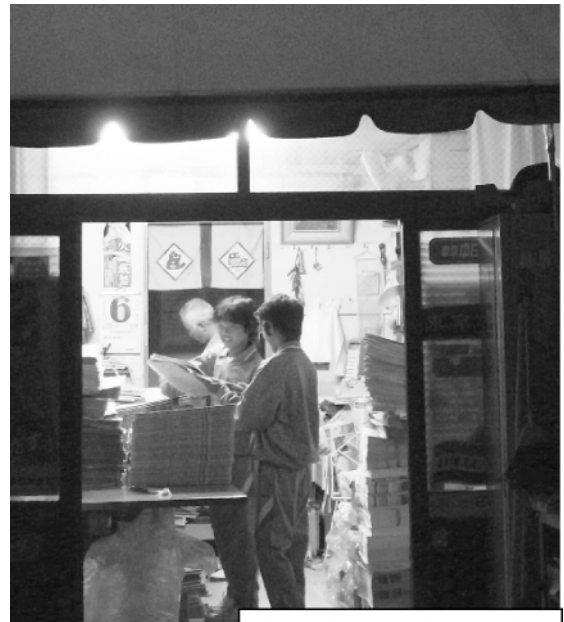
子育て世代の悩みは、子どもの年齢によって異なる。調査によると、保育が必要な時期では、親子と一緒に遊ぶ安心・安全な場がないことが最も大きな悩みになっているが、小学校では、子どものしつけ、中学校や高校になると、子どもの友人関係、進路選択が悩みの中心となっていく。悩みの変化によって、当然、子育て世代が求める支援も違ってくる。今期の研究において、十分な検証ができなかったが、川崎市は、子どものライフステージ、さらに、親自身のライフステージに合わせた支援システムが出来ているかどうか、すでにある様々な支援システムは、今の子どもや親のニーズに合った機能を果たしているのかについて、いずれさらに詳しい検証を行う必要があるであろう。



＝ 検討に際し参考とした事例（一部） ＝

■臨港中学校区地域教育会議の「職場体験等」の実践

地域のお祭りに参加することから始まった中学生の地域体験活動は、臨港中学校との共催で、自主選択型職業体験学習に発展した。これは、「地域で汗を流して働く人の姿を見てもらいたい」、「勉強も大事だけど、いろんな体験もして欲しい」という思いから始められたものである。この活動は、子どもたちにとって、よい体験・よい出会いになっている。学校内では問題を抱えていた子どもたちも、地域の方々の手伝いをする中でよい生活習慣を身に付けた、という例もあるようだ。また、受け入れ先からも「今時の中学生もすてたもんじゃない」「暑いのによく頑張っているよ」という好意的な感想が聞かれる。この体験学習を通じて、地域の大人たちと子どもたちの間に様々な良い出会いが作られている。



朝3時集合の新聞配達

■大学生の環境教育ボランティア — 大学も自然も地域資源

川崎市麻生区岡上地区には鶴見川が流れている。この近辺では和光大学・かわ道楽の学生たちが自然環境教育ボランティアをしていて、特に力を入れているのは鶴見川におけるクリーンアップと魚採りを中心とした親子参加イベントである。川から隔離されて育っている現代の親子は恐る恐る入っていくが、長靴越しに感じる水温、そして一歩歩む度に足もとから散っていく小魚の群れに次第に興奮が高まり、気付くと皆濡れるのも気にせず魚を追いかけていくようになる。こうなると、生きものを取るのが上手な子がいたり、流れの中の歩みが

上手な子がいたり、石に夢中になる子がいたり、普段と異なる顔を見せる。無口な子がよく話すようになったり、目立たなかった子がヒーローになったりする。日常生活での「正解」や人間関係から開放された独自の空間が出来るのである。

またこうした場をもたらず大学生もまた重要な地域の資源である。その後も地元の大学生と仲良しになる子どもも出てくる。そして、彼ら自身も10年後には子育て世代となりうる予備軍でもあることから考えると、大学生と地域の子どもたちの交流の場は、「未来の子育て支援」にもなっているといえよう。



鶴見川での活動の様子